

令和5年2月22日

## 令和4年度日本芸術院会員候補者の決定について

日本芸術院（院長 高階秀爾）は、芸術上の功績顕著な芸術家9名を、日本芸術院会員候補者として決定しましたので、お知らせします。

### 1. 日本芸術院会員候補者の決定

日本芸術院は、令和4年9月中旬、10月下旬に開催した会員候補者推薦委員会、及び11月下旬から12月中旬にかけて開催した各部の会員候補者選考委員会にて選考の上、会員による投票を経て会員候補者を内定し、会員総会の承認を経て令和5年2月8日に9名を日本芸術院会員候補者として決定し、同日付けで日本芸術院長から文部科学大臣に上申しました。

令和5年3月1日付けをもって文部科学大臣から発令の予定です。

### 2. 文部科学大臣に上申した会員候補者（略歴・賞歴等は別添資料を御覧ください。）

#### 【第一部（美術）】

第一分科（絵画）	た ぶち	とし お	夫
	田 洩	俊 夫	
第三分科（工芸）	みや た	りょう へい	平
	宮 田	亮 平	
第五分科（建築・デザイン）	よこ お	ただ のり	則
	横 尾	忠 則	
第六分科（写真・映像）	すぎ もと	ひろ し	司
	杉 本	博 司	

#### 【第三部（音楽・演劇・舞踊）】（分科内は五十音順）

第十一分科（能楽）	かん ぜ	きよ かず	
	観 世	清 和	
第十三分科（文楽）	とよ たけ	さきた ゆう	いくた ようぞう
	豊 竹	咲太夫	（本名：生田 陽三）
第十七分科（演劇）	あさ み	れ い	のぶもと たかこ
	麻 実	れい	（本名：信元 孝子）
第十七分科（演劇）	しら いし	か よ こ	ふかお か よ こ
	白 石	加代子	（本名：深尾 加代子）
第十八分科（映画）※	くろ やなぎ	てつ こ	
	黒 柳	徹 子	

※アニメーションや放送、脚本を含む。

（別添資料の年齢は発令予定日時点の満年齢です。）

<担当>

日本芸術院

事務長 小松 清

庶務係長 鈴木 啓太

電話 03-3821-7191

絵画

た ぶち とし お  
田 渕 俊 夫



#### 推薦理由

氏は東京藝術大学において学び、平山郁夫に師事し、幾多の研鑽を積み、院展の新しい風景画の世界を確立し、今なお前進している。奈良や京都の日本の古典美術、アフリカやインド、中国の古代遺跡をたずね取材し、長い年月をかけて様々な地域の自然のたたずまいと時代を考証して描いてゆく制作態度は堅実性が非常に高い。「智積院講堂の襖絵 [朝陽]・[夕陽] 等 60 面」、「薬師寺食堂の壁画 [阿弥陀三尊浄土図]・[仏教伝来の道と薬師寺]」等、数々の作品を寺社に奉納し、それぞれの作品はその空間と共に観る者を静謐な意識へと導き、日本の四季の移ろいを表現した繊細な画面に、自然への畏敬の念と力強さを同時に感じ取ることができる。日本画家としての功績は極めて顕著であり、描かれた作品はていねいな筆使いと優美な気品を示し高く評価されている。

#### 【略歴】

- 昭和16年8月15日 東京府東京市（現：東京都）生まれ 81歳
- 昭和40年 東京藝術大学美術学部絵画科（日本画専攻）卒業（同42年同大学院美術研究科修了）
- 昭和45年 平山郁夫に師事
- 昭和59年 愛知県立芸術大学美術学部助教授（同60年まで、平成21年客員教授、同26年まで）
- 平成7年 東京藝術大学大学院美術研究科教授（同17年副学長、同21年名誉教授）
- 平成28年 （公財）日本美術院理事長（現在まで）

#### 【賞歴】

- 昭和63年 再興第73回院展文部大臣賞（「緑風」に対して）
- 平成6年 再興第79回院展内閣総理大臣賞（「大地Ⅰ・大地Ⅱ」に対して）
- 平成10年 MOA 岡田茂吉賞大賞
- 平成23年 第64回中日文化賞
- 平成24年 第44回東海テレビ文化賞
- 平成30年 第74回恩賜賞・日本芸術院賞（「渦潮」に対して）
- 令和元年 文化功労者
- 令和4年 旭日中綬章

工芸

みや た りょう へい  
宮 田 亮 平



#### 推薦理由

氏は日本における金工作家の第一人者である。イルカをモチーフにした代表作「シュプリングエン」シリーズや東京駅の「銀の鈴」など、その作品は多くの人々に親しまれているとともに、作品がメトロポリタン美術館に収蔵されるなど国際的評価を得ている。東京藝術大学の学長を2期10年の間務めた後の、文化庁長官時代には、皇室ゆかりの文化財を公開する「紡ぐプロジェクト」を通して文化行政を広くアピールし、地域文化を国内外に発信する「日本遺産」などで日本文化の国際化を推進した。令和元年には天皇陛下の即位を祝う内閣からの献上品を制作するなど、これまでの実績と経験を活かし、後進の指導と育成、芸術の発展に貢献している。豊かな人間力による幅広い交流と数々の要職歴任を通じて、文化芸術の普及に尽力している。

#### 【略歴】

- 昭和20年6月8日 新潟県生まれ 77歳
- 昭和45年 東京藝術大学美術学部工芸科鍛金専攻卒業（同47年同大学院美術研究科工芸専門課程鍛金専攻修了）
- 平成2年 文部省在外研究員 ドイツ・ハンブルグ工芸美術博物館派遣
- 平成9年 東京藝術大学教授（同13年美術学部長、同16年理事・副学長、同17年学長、同28年名誉教授）
- 平成28年 文化庁長官（令和3年まで）
- 令和4年 （公社）日展理事長（現在まで）

#### 【賞歴】

- 昭和60年 西武工芸大賞奨励賞（「流動」に対して）
- 平成8年 国際ジュダイカ・デザイン・コンペティション制作銅賞
- 平成19年 第46回日本現代工芸美術展内閣総理大臣賞（「シュプリングエン」に対して）
- 平成21年 第41回日展内閣総理大臣賞（「シュプリングエン『悠』」に対して）
- 平成24年 第68回日本芸術院賞（「シュプリングエン『翔』」に対して）
- 令和4年 第75回新潟日報文化賞（「金工作家としての創作活動と国内芸術文化振興への貢献」に対して）

## 建築・デザイン

よこ お ただ のり  
横 尾 忠 則



### 推薦理由

日本のグラフィック・デザイン界において 1960 年代前半から独自のイラストレーションを主体とするポスターデザインで注目され、海外の評価は「第 6 回パリ青年ビエンナーレ」展版画部門グランプリ受賞に始まる数々の美術・デザイン賞、各国公私立美術館個展招待等に現れている。油画作品を含め劇的かつ物語性を内包する視覚表現はデザイン、アートの領域を超えて一般市民の広く支持する作家の存在を形成した。令和 3 年に愛知県美術館、東京都現代美術館ほかを巡回した個展においては初期のデザイン表現を再公開し、現在の主題として注目される「寒山拾得」の作品群に絶妙闊達の技法を展開した。活発な創作活動は近年の受賞歴にも反映され、朝日賞、高松宮殿下記念世界文化賞が続いている。著作も多く、後進への影響力は計り知れないものがある。

### 【略歴】

昭和 11 年 6 月 27 日 兵庫県生まれ 86 歳

平成 13 年 多摩美術大学大学院教授（同 16 年客員教授、現在まで）

### 【賞歴】

昭和 44 年 第 6 回パリ青年ビエンナーレ展版画部門グランプリ（「責場 A、B、C」に対して）

昭和 48 年 東京 ADC 賞最高賞（平凡社「太陽」集英社「プレイボーイ」駿々堂出版「江戸のデザイン」エディトリアルデザイン横尾忠則近作展、灰塚印刷ポスターに対して）

平成 7 年 第 36 回毎日芸術賞（「『横尾忠則の全ポスター』をはじめとする永年の功績」に対して）

平成 12 年 ニューヨーク ADC Hall of Fame 授与（名誉の殿堂入り）

平成 13 年 紫綬褒章

平成 23 年 旭日小綬章

平成 24 年 2011 年度朝日賞（「常に時代と共振する斬新なグラフィックデザイン・絵画の制作」に対して）

平成 27 年 第 27 回高松宮殿下記念世界文化賞

写真・映像

すぎもとひろし  
杉本博司



#### 推薦理由

氏は、この40数年、現代写真の世界のみならず、現代美術の分野においても、高い評価を得てきた作家である。「ジオラマ」、「劇場」、「海景」など初期の代表作から、「建築」、「関数模型」、「放電場」の連作にいたる多様な写真は言うまでもなく、自ら収集してきた古美術や化石、隕石などのコレクションとのコラボレーションや文楽など古典芸能にも深く関わって、実に多彩な才能を発揮している。氏は「真実らしさで満ちている世界では、写真が真実を写し出すことはない」としながらも、「写真には嘘をつかせない」というモダニズムの倫理を厳密に守ろうとしている。写真の起源はもとより、芸術とは何か、広く物事の根源を考える姿勢を貫いている。一個人の存在を超えた、悠久の時間の蓄積や流れを独自のコンセプトと表現手段を駆使して、今なお、さらに国際的に活躍している。

#### 【略歴】

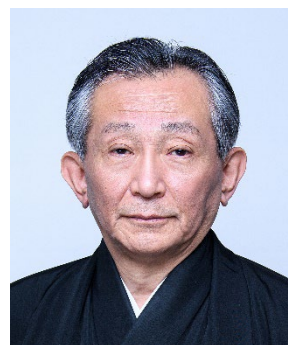
昭和23年2月23日 東京都生まれ 75歳  
昭和45年 立教大学経済学部卒業  
平成21年 (一財)小田原文化財団設立(現公益財団法人)  
平成29年 小田原に「江之浦測候所」をオープン  
令和3年 京都・両足院大書院襖絵「放電場」完成

#### 【賞歴】

平成元年 第30回毎日芸術賞  
平成13年 第21回ハッセルブラッド国際写真賞  
平成21年 第21回高松宮殿下記念世界文化賞(絵画部門)  
平成22年 紫綬褒章  
平成25年 フランス芸術文化勲章オフィシエ章  
平成26年 第1回イサム・ノグチ賞  
平成29年 文化功労者

能楽

かん ぜ きよ かず  
観 世 清 和



(撮影：鍋島 徳恭)

### 推薦理由

氏は、観世流宗家二十五世左近氏の長男として生を享け、父の厳格なる指導を受ける。父の急逝により、若くして宗家を継承して以来、弛まぬ研鑽を積み、品格を第一とし、真摯な舞台への取組みにより、流儀は言うに及ばず、能楽界を牽引する存在となっている。三老女（関寺小町・姨捨・檜垣）を始め、数々の秘曲・大曲の優れた舞台成果によって令和2年度第77回日本芸術院賞を受賞している。令和3年に「独演・翁付五番能」（翁・高砂・清経・羽衣・卒都婆小町・石橋）に挑むなど、益々その芸境を拓けている。舞台・継承・発展の三拍子を揃えて、能楽はもとより、我が国文化芸術の振興発展に寄与しており、その功績は顕著である。

### 【略歴】

昭和34年 東京都生まれ 63歳  
父二十五世観世宗家 観世左近元正に師事  
昭和39年 「鞍馬天狗」花見にて初舞台  
昭和59年 国立能楽堂能楽（三役）研修講師（平成2年まで、同14年主任講師、現在まで）  
平成2年 二十六世観世宗家継承  
平成3年 (財)観世文庫設立 理事長（現在まで ※現一般財団法人）  
平成5年 (社)日本能楽会常務理事（現在まで ※現一般社団法人）  
平成6年 (社)観世会理事長（現在まで ※現一般社団法人）  
平成22年 (公社)能楽協会顧問（現在まで）  
平成27年 能楽宗家会会長（現在まで）  
令和4年 東京藝術大学客員教授（現在まで）

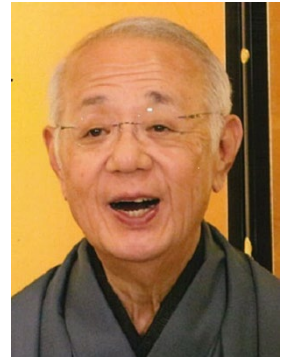
### 【賞歴】

平成11年 フランス芸術文化勲章シュバリエ章  
平成25年 第63回芸術選奨文部科学大臣賞（能「定家」他の成果に対して）  
平成25年 第33回伝統文化ポラ賞大賞（「能楽の伝承・振興」に対して）  
平成27年 紫綬褒章  
令和元年 第49回JXTG音楽賞邦楽部門受賞  
令和3年 第77回日本芸術院賞（「能「山姥 雪月花之舞」を始め近年の優れた舞台成果」に対して）

文楽

とよ たけ さき た ゆう  
豊 竹 咲 太 夫

(本名 いくた ようぞう  
生田 陽三)



### 推薦理由

氏は昭和の名人と謳われた、山城少掾氏、父八世綱太夫氏と云う文楽の歴史に残る二人の元で厳しい修行を積み、若手の頃より頭角をあらわす。永らく途絶えていた近松門左衛門作「今宮心中」、「隅田川」の復曲や、三島由紀夫作「鬮売恋曳網」等の作曲にも意欲的に取り組む。平成21年には太夫の最高峰の「切場語り」に昇格し、三身一体と云われる文楽の一角を永きに亘り支えてきた。若手の育成及び文楽の発展に尽力するなどの業績に対し、令和元年には重要無形文化財「人形浄瑠璃文楽太夫」（各個認定）保持者、令和3年には文化功労者にも認定されるなど、その功績は高く評価されている。

### 【略歴】

- 昭和19年5月10日 大阪府生まれ 78歳
- 昭和28年 豊竹山城少掾に入門、竹本綱子太夫と名乗る
- 昭和28年 四ツ橋文楽座で初舞台
- 昭和41年 道頓堀朝日座「鬼一法眼三略巻・菊畑の段」虎蔵で初代豊竹咲大夫と改名（平成28年より豊竹咲太夫と表記）
- 平成21年 切場語りになる（重要な場を語る太夫に与えられる最高の資格）

### 【賞歴】

- 平成11年 第49回芸術選奨文部大臣賞（「仮名手本忠臣蔵 山科閑居の段」に対して）
- 平成16年 紫綬褒章
- 平成19年 第28回松尾芸能賞優秀賞（「1年間の活動」に対して）
- 平成21年 第65回日本芸術院賞（「文楽大夫としての近年の卓越した演技」に対して）
- 平成23年 第41回エクソンモービル音楽賞 邦楽部門（「1年間の活動」に対して）
- 平成24年 第53回毎日芸術賞（「ひらかな盛衰記・松右衛門内の段」「絵本太功記・尼ヶ崎の段」に対して）
- 令和 元年 重要無形文化財「人形浄瑠璃文楽太夫」（各個認定）保持者
- 令和 3年 文化功労者

## 演劇

あさ み  
麻 実 れ い

(本名 のぶもと たか こ  
信元 孝子)



## 推薦理由

氏は日本の演劇文化の一翼を担う宝塚の出身者として日本演劇に大きな存在感を示してきた。退団後も男役の枠を超えて、見事な演技力によって現代演劇を牽引した功績は他を圧倒するものがあり、「オイディプス王」「タイタス・アンドロニカス」「AOI/KOMACHI」など海外公演でもその成果を示した。令和3年「森 フォレ」の祖母リュス役、「ガラスの動物園」の母アマンダ役の圧倒的な存在感など、その演技力は現在進行形で益々円熟を深めている。これまで芸術院に少なかった女性の一人として、日本のこれからの芸術を牽引すべき人物であると同時に、紫綬褒章、旭日小綬章、芸術選奨文部科学大臣賞のほか、すでに数多く受賞された演劇賞によって証明されてきたその能力をここに高く評価する。

## 【略歴】

昭和25年3月11日 東京都生まれ 72歳  
昭和43年 宝塚音楽学校入学  
昭和45年 宝塚歌劇団入団（同60年退団）

## 【賞歴】

平成 8年 第3回読売演劇大賞最優秀女優賞（「ハムレット」「エンジェルス・イン・アメリカ」に対して）  
平成 9年 第18回松尾芸能賞演劇優秀賞（「蜘蛛女のキス」に対して）  
平成13年 第24回日本アカデミー賞優秀助演女優賞（「十五才・学校IV」に対して）  
平成14年 第43回毎日芸術賞（演劇）（「『サラ』の演技」に対して）  
平成16年 第54回芸術選奨文部科学大臣賞（「桜の園」「AOI/KOMACHI」に対して）  
平成18年 紫綬褒章  
平成19年 第6回朝日舞台芸術賞舞台芸術賞（「黒蜥蜴」に対して）  
平成29年 第42回菊田一夫演劇賞大賞（「8月の家族たち August Osage County」「炎アンサンディ」に対して）  
令和 2年 旭日小綬章



## 演劇

しら いし か よ こ  
白 石 加 代 子

(本名 ふかお かよこ  
深尾 加代子)



(撮影：HONTANI)

### 推薦理由

氏は昭和42年に早稲田小劇場（現・SCOT）に入団し、鈴木忠志氏演出の「劇的なるものをめぐってⅡ」で演劇界に衝撃を与えた。同作では鶴屋南北、泉鏡花、ベケットらの古今東西の傑作から引用され再構成された劇言語を既存の演技術とはまったく異なる卓抜な身体表現によって演じ、一躍日本の小劇場演劇を代表する俳優となった。その圧倒的な演技力は国際的にも高い評価を得ている。退団後は、蜷川幸雄氏、野田秀樹氏ら名だたる演出家の作品に出演して稀有な存在感を放ち、朗読劇「百物語」シリーズは日本各地で絶大な人気を博して演劇文化の普及に大きく貢献している。独自の演技の境地を拓き現代演劇の発展に寄与してきた多大な功績と、芸術選奨文部科学大臣賞をはじめとする数多の受賞歴、紫綬褒章、旭日小綬章を受章した実力を高く評価する。

### 【略歴】

昭和16年生まれ 81歳

昭和42年 早稲田小劇場に入団（平成元年退団）

平成4年 「百物語」（鴨下信一演出）開始、ライフワークとなる

### 【賞歴】

昭和54年 第1回観世寿夫記念法政大学能楽賞

平成6年 第1回読売演劇大賞優秀女優賞（「百物語」に対して）

平成13年 第51回芸術選奨文部科学大臣賞（演劇部門）（「グリークス」「百物語」に対して）

平成13年 第9回スポニチ文化芸術大賞優秀賞（「百物語」に対して）

平成17年 紫綬褒章

平成24年 旭日小綬章

平成24年 第33回松尾芸能賞優秀賞

平成26年 第62回菊池寛賞

令和2年 第18回坪内逍遙大賞

映画（アニメーションや放送、脚本を含む）

くろ やなぎ てつ こ  
黒 柳 徹 子



（撮影：下村 一喜）

### 推薦理由

氏は、日本のテレビ放送開始の昭和28年から今日まで、70年近く、放送界で活躍してきた。その仕事内容をふり返ると、俳優としての演技、司会、インタビュー等、それぞれ特有の技術が必要な放送の仕事幅広く行ってきた氏は、そのトータルで、放送界における卓越した「表現者」である。声、言葉、表情、身体の動き、放送空間の中で人はどう振る舞えばいいのか、それまでの日本になかった放送界における表現の道を切り拓いたパイオニアである。また、俳優としての氏は、文学座付属演劇研究所やニューヨークの演劇学校で本格的に演技を学び、平成元年からは毎年、海外の喜劇を紹介する舞台演劇で主演を続け、その演技が高く評価され、読売演劇大賞を始めとして数々の賞を受けている。こうした高度な表現力が放送上の表現を支えており、放送界で後に続く人々にとっての手本となる存在であり続けてきた。

### 【略歴】

昭和27年 東洋音楽学校（現：東京音楽大学）声楽科卒業

昭和28年 東京放送劇団（NHK）入団

### 【賞歴】

昭和36年 第1回日本放送作家協会賞 女性演技者賞

昭和59年 第35回NHK放送文化賞

平成9年 第38回毎日芸術賞（「『幸せの背くらべ』『マスター・クラス』での演技」に対して）

平成9年 第4回読売演劇大賞 大賞、最優秀女優賞（「『幸せの背くらべ』『マスター・クラス』での演技」に対して）

平成9年 第23回放送文化基金賞（「徹子の部屋」に対して）

平成15年 勲三等瑞宝章

平成18年 第54回菊池寛賞（「徹子の部屋」に対して）

平成25年 第38回菊田一夫演劇賞特別賞（「永年の翻訳劇に対する情熱と功績」に対して）

平成27年 文化功労者

# 日本芸術院について

## 1. 設置目的

日本芸術院は、美術、文芸、音楽、演劇、舞踊等芸術各分野の優れた芸術家を優遇するために設けられた荣誉機関として設置。

## 2. 設置根拠及び沿革

(1) 文部科学省設置法第32条、日本芸術院令

(2) 大正8年、帝国美術院として発足。

昭和12年、文芸、芸能の2部門を加え帝国芸術院に改組、拡充。

昭和22年、日本芸術院に名称変更し、現在に至っている。

## 3. 組織

日本芸術院は、院長1名と会員（終身）120名以内で構成され、会則により3部18分科に分かれ所属し、本院の設置目的を達するため必要な事業を行う。

院長は、芸術に関し卓越した識見を有する者について、会員の選挙によって選ばれ文部科学大臣により任命される。

会員は、芸術上の功績顕著な芸術家について、会員からなる部会の推薦（部会における選挙）と総会の承認によって選ばれ、文部科学大臣により任命される。

(令和5年1月15日現在)

院長 高階秀爾	第一部（美術）……………現員 47名 部長 奥田 小由女
	第二部（文芸）……………現員 29名 部長 辻原 登
	第三部（音楽、演劇、舞踊）…現員 24名 部長 野村 萬
	事務長————— 庶務係

〔定員 計 120名（現員100名）〕

## 4. 主な事業

① 芸術の発達に寄与する活動を行うとともに、芸術に関する重要事項を審議し、これに関し文部科学大臣又は文化庁長官に意見を述べることができる。

② 会員以外の者で、卓越した芸術作品と認められるものを制作した者及び芸術の進歩に貢献する顕著な業績があると認められる者に対して、毎年、恩賜賞と日本芸術院賞を授与している。

③ 前記の他、所蔵作品の公開展示（無料）、日本芸術院賞受賞作品展（無料）、会員による講演会等の開催（無料）、日本芸術院会員記録の制作、日本芸術院の活動記録作製等を行っている。

## 5. 予算額

令和5年度予算案額 528百万円（うち会員年金303百万円）

令和4年度 518百万円（うち会員年金303百万円）